


坂の上の楓たち

(その2)



 市川二中同窓会
再発足20周年記念誌
2017

坂の上の楓たち

その2の目次

- ・はげ山の新校舎と粗末な教科書とイケメン先生と
1期 天野 睦子
- ・1枚の年賀ハガキから-市川二中同窓会再発足物語-
1期 岸田 弘
- ・市川二中同窓会再発足20周年を迎えて
1期 桑村 益夫
- ・能勢一雄先生と囲碁
2期 森山 正義

*会報創刊号と復刊1号～5号抜粋

……2002年から2008年の概略

- *同窓会会報創刊号
- *五十年史を手にして
- *初恋の季節 市川二中ブラバン雄皆さんに
2期 藤井 陽一
- *SMAPと平治親分
5期 市川 澄子



- ・母校の思い出
5期 中路 徐子
- ・同窓会との絆
5期 三村 武教
- ・心のふるさと
5期 本吉 健也
- ・二中時代の思い出
6期 井上 富美子
- ・暮れるまで裸足でしたっけ-女子箏球部の草分け時代-
6期 佐伯 美由
- ・僕の中
6期 高久 明利
- *手児奈霊神堂の風景 雪景色、まつり、七夕

市川二中同窓会再発足20周年記念誌(2017)

ハゲ山の上の新校舎と 粗末な教科書とイケメン先生と

1期 天野 睦子

桜の美しい二中の校門坂を登り、整備されたグラウンドのユニフォーム姿や三階建の鉄筋校舎を目にすると、もう七十年近くになりますが、二中開校当時のことが次々に思い出されます。新校舎 須和田ヶ丘は戦時中立ち入り禁止のハゲ山で高射砲陣地でした。間借りしていた真間小から初めてその崖の上のハゲ山へ登ったのは二年生の秋(昭和二十三年)。広々とした運動場の先に赤い屋根の小さな新校舎が見えました。たった四教室。そこに一期生が入りました。職員室は廊下の突き当りを区切っただけでしたが、やっと自分の中学校に出会えた嬉しさがこみ上げていました。

当時このハゲ山にはあちこちに兵舎が点在し、そこは市川五中の教室でした。昭和二十四年五月、七教室が増築されて間借り生活は解消。初めて全校生徒が須和田校舎に移って来ました。三年生は五中が合併して七クラスになり、その七クラス全員が新校舎に入りましたが、下級生はまだ隙間風が入るとか、隣の教室の声が筒抜けになると評判の悪い兵舎教室でした。

校舎で忘れられないのは、この三年生になって完成した新しい教室の思い出です。東側の四教室に入ったA・B・C・Dのクラスは競って教室を磨き上げました。雑巾にぬか袋まで持参して隣の廊下の境目までピカピカになるまでよく磨きました。週番が点検に来るためだけではありません。新校舎建設に向けて陳情や募金活動をする先生や父兄(P.T.A.)のご努力を、『二中校内新聞』や父兄の姿からみんな知っていました。ですから

等々。検閲許可がなかなか下りず、章ごとの分冊方式で発行され、十五冊以上発行されましたが、紙の事情などで各学年に行き渡る時間がなかったようでした。

傘寿の会 市川二中が真間小の教室を間借りして開校した昭和二十二年五月十日頃はまだ戦後の荒廃と貧困が続く、男女共学の教室は落ち着かず不安でした。

そうした中に登場したのが二十代の若い先生方です。師範学校を卒業して大学進学を目指しておられた方や東大の学生が代用教員として二年足らずの間、実に真剣に生徒に向き合ってくださいました。共に走るリレーの練習や劇の演出、教材のガリ版刷りに遠足の付添い。しかもイケメン揃い。生徒たちは注目し憧れました。私の担任の故橋本司郎先生は紙不足の中、クラス文集を作り、自宅のシエークスパ全集を教室の片隅にそっと置いてくださいました。

この開校時の先生が五人も、「一期傘寿の会」そして最後の同期会へご出席くださったのです。ありがたかったです！濱田龍二先生は関西から、草深清先生は杖をつかれて。残念ながらお二方は翌年そして今年と相次いで旅立たれました。飯盛宏先生、佐藤千壽子先生、中村櫻先生はご健在です。先生方が青春時代を共にしてくださいましたお蔭で自由で心豊かな中学時代でした。傘寿の会では二年間で十名の同期生を弔い偲びました。お互い健康状態に始まって話は尽きず時を忘れました。フィナーレの校歌斉唱で脳裏に去来したのは過ぎし日の須和田ヶ丘の情景でした。

大切に、きれいにしなければという気持ちでした。その上、教室の下の空き地は各クラス自由にサツマイモ畑にしたり、土俵を作ったり花壇を作ったり…。でも木造校舎は安普請の悲しさ、活力あふれる男子生徒がぶつかると羽目板が破れて隣の教室が覗けたり、廊下が抜けたりもしました。

この教室での十か月足らずの間にクラブ活動が本格化しました。体育系のテニス部は夏休み返上でコートづくりから始めて県大会まで行き、バレー部は忠霊塔(現在須和田公園の慰霊碑)前のコートで、卓球部は兵舎教室で、二年生も一緒に汗を流す機会がありました。文化系は図工部が市内の展覧会に向けて兵舎教室で制作に励んだ、おぼろげな記憶のみです。

教科書 一期生は終戦直後、国民学校で教科書を黒塗りしたり、新聞紙のような大きな紙に刷られたものを切ったり折って綴じて教科書を作った世代です。二中に入っても教科書はなかなか手元に届きません。紙不足で、手にした教科書はA5判かB5かB6判くらいの小さくて薄く粗末なものでした。私が記憶していたのは、一年の秋に手にした『あたらしい憲法のはなし』という教科書です。前年に憲法が公布され、戦争放棄とか憲法のイラストが印象的でした。アメリカの占領下であり、本の奥付の横文字が気になっていたので調べてみると、『Approved by Ministry of Education Date July 23 1947』と「昭和二十二年八月二日 文部省検定」が併記されていて、当時どの教科書もGHQの検閲を必要としたことが判明。また理科の教科書は三年生の秋ごろ六・七冊まとめて配られ、テストの時に慌てた覚えがありました。その表題がともユニークなものだったので調べてみると、「空気はどんなはたらきをするの」とか、「水はどのようにに大切か」「火をどのように使ったらよいか」「土はどのようににできたか」「動物は人の生活にどんなに役にたっているか」

【追記】

- ・二期傘寿の会」の記録写真などは二中同窓会のホームページに掲載されています。
- ・二中の校舎の歴史は『市川二中五十年史』に詳細に記録されています。
- ・理科の教科書については川崎市立柿生中学校の柿生郷土資料館での企画展「戦中・戦後の教科書を見てみよう」を参考にしました。

会報19号(2016)「第1期の教科書について」より



細谷廣澄氏(1期)所蔵

一枚の年賀ハガキから —市川二中同窓会再発足物語—

1期 岸田 弘

同窓会の再発足は、簡単に行われたものではなかった。その端緒は、一九八九年元旦の年賀ハガキから語らなければならぬ。年賀ハガキは岸田から山田齊へのもので、「二中も創立五十年を迎えるので、何かしなくては」というもので、同年三月に恩師櫻井先生の個展後に参加者による最初の顔合わせを行った。

次いで四月より十一月二十三日の「一期同窓会」の再発足に向けて名簿作成から始めた。「二期同窓会」の目的は、一期生として記念行事についてリーダーとしての自覚と協力体制の構築と資金調達を行うものであった。

市川二中とのアプローチは、一九九〇年四月七日に山田と岸田で校長を訪問して、『記念史』発行に向けて組織化の打ち合わせを行い、委員会を発足させ開催は学校で行うことになった。

しかし、『記念史』発行は資料がほとんどないまま、委員会の第一回は一九九二年十一月七日に開催された。当時、委員は現役社会人で多忙のため資料収集は難航続きであった。

一期の再発足同窓会は、一九八九年十一月二十三日に開催されたが、次回以降はオリンピック開催の年ということで四年に一回(次回だけは三年後、二〇〇六年から隔年)だったので、一期のコミュニケーションとチームワークを深め資料収集のために「おにぎり会」を発足させ、昔話に花を咲かせながら二中当時の記憶を呼び起こして資料収集に役立てた。

同窓会は会費を上積みさせ、『記念史』発行の手助けをし、発

市川二中同窓会再発足20周年を迎えて

1期 桑村 益夫

市川二中同窓会が、一期生が高校二年生になった昭和二十六年に発足したことを覚えているのは十期生位までではないでしようか。

平成二十八年に急逝された山本洋之氏から、卒業年次に生徒会長であった私に同窓会設立の呼びかけがあり、一、二期生の元生徒会役員が中心になり、鹿倉操先生(会報第十一号「恩師を訪ねて」参照)のご指導を仰ぎながら発足させました。

当時の二中には未だ講堂がなく、真間小の講堂を借り、講演、音楽、演劇など手作りのアトラクションをまじえての総会を開催し、卒業生名簿を発行、同窓会報第一号を発行する等の活動を行いました。しかし発足後七、八年が経過、発足当時の役員が社会人となるにつれ活動は衰退し、いつしか雲散霧消してしまいました。発足時に初代会長であった私の力不足を今だに大変申し訳なく思っています。

平成九年、公立中学発足五十年を期して故山田齊氏が編集委員長になり、編集委員各位の絶大なご尽力により、二百二十一頁の公立中学では類を見ない立派な『市川二中五十年史』が刊行されました。これを一人でも多くの卒業生に読んで頂くために休眠状態であった同窓会を再発足させようとの機運が高まり、海外勤務から帰国したばかりの私も加わって、再発足を呼び掛けるポスターを市川駅や市内に掲示し、僅か数十名で臨時総会を開催し、創立五十周年を機に再発足し、初代会長であった私及び再発足後の初代会長として、同窓会名簿の整備、『五十年史』の頒布を最重要課題として活動を開始しました。

行後は開催時に会費の他に募金を行い、同窓会活動にも手助けをした。かくして、「おにぎり会」は「同期会」の原動力になり「同窓会」につながったと自負していて、「同期会」が終了しても継続されている。

「同窓会」の再発足であるが、『記念史』発行のための編集委員会(責任者 山田齊)が発足し、途中「同窓会再発足」の提案があったが、まだ『記念史』の目的がたっていないこともあってまとまらなかった。しかし、後に広く『記念史』を広めるために名簿委員会(責任者 桑村益夫)が組織化され、さらに「同窓会再発足」の再提案が天野睦子からあり、今回はようやく全員賛同が得られ「再発足総会」(議長 岸田弘)は一九九七年十一月一日に開催され、同年十一月十五日の「創立五十周年記念式典」に間に合わせた。(敬称略)

会報18号(2015)「第50回おにぎり会」より



二中新入生(68期)が撮影

覚束ない足取りでの再発足でしたが、口コミで徐々に活動の輪が広がりが有能な人材が活動に加わって下さったお蔭で、四十年以上の時空を超え、同窓会は立派に再発足し、ここに二十年を迎えることができましたことは感無量です。

再発足の翌年に同窓会報復刊第一号が発行され、山田尚美副会長(五期)他の役員各位のご協力、学校当局のご支援に遅ればせながら心から感謝申し上げます。

再発足の六年後に私が第三の職場で中国に冷凍食品工場建設を命ぜられたため、故篠崎實氏(二期)に会長職をバトンタッチし、活動が徐々に軌道に乗り同窓会員数が増え、運営に参加する役員の人材も充実し、第三代会長に三村武教氏(五期)が就任されてからは、同窓会名簿の整備、会報や諸規定の充実、ホームページの立ち上げ等、活動内容が格段に活発となりました。この間に学校行事の須和田祭や、二中の学区区の行事にも参加し、活動の輪が拡大しました。

平成二十六年には斎藤康氏(十六期)が第四代会長に就任され、今回の再発足二十周年記念総会を盛大に迎えることができましたことはご同慶の至りであります。

同窓会活動の目的は、卒業生相互や学校との絆を保ち、良き伝統を築き、母校の発展に寄与し、併せて地域社会にも貢献することではないかと考えますが、実際に同窓会の運営に関与し、維持していくことは容易ではありません。友人や母校に対する愛と献身の心が不可欠です。

再発足当時僅か十数名で行った同窓会報の発送に今では四十名以上の方々が参加して下さるようになりました。活動に直接参加できない方々には、同窓会活動の唯一の財源である賛助金を納めることで支援して下さいるようお願い致します。

末筆となり真に恐縮ですが、私を支え活動をご支援下さった

同窓会会員、役員、並びに先生方各位に対し、改めて心より厚く御礼申し上げます。

昭51年 1期生初めての同期会開催（恩師12名を含む101名の参加）於：二中体育館



能勢一雄先生と囲碁

2期 森山 正義

（昭和26年3月卒）

私が昭和二十三年から同二十六年三月まで二中在校中能勢一雄先生は教頭であられた。それから二十数年後に能勢先生と親しく囲碁を打つ間柄となった。

私は昭和四十七年七月市川市役所の人事異動で教育委員会事務局管理庶務課経理係長に転任した。三十七歳であった。その時能勢先生は教育委員会事務局の全ての職務を統括する教育次長の要職にあった。

当時週休二日制は未だ実施されておらず、土曜日は午前中勤務時間であった。ある土曜日の午後、残業をしていると能勢先生は外出先から戻られて次長席から「森山君」と私を呼ぶ。同うと「五時まで時間が空いた。囲碁をやろう」と言う。そして事務局のフロアーの奥の方にある教育研究所に入って行かれる。ついて行くとその奥に四畳半程の広さの教育相談室がある。小さなテーブルとソファアの応接セットがある。能勢先生はテーブルクロスの下から碁盤と碁石をテーブルの上に出す。

私は三十二歳で囲碁を教わった。そこで四子を置くことを伺った。能勢先生は「いい」と云われる。そのとき三局打った。全て私の惨敗であった。ウィークデー午後五時十五分に勤務が終了する。能勢先生が夜の会議（六時半とか七時から始まる）へ出席される前に時間が空くと私と教育相談室に籠り一局打つ。こうして能勢先生の空き時間のつなぎ役であった。

圧巻はお正月の対局である。一月二日午前十時頃に伺う。するともう市立の学校長や教頭先生方数人が座卓をはさんで祝宴が始まっている。末席に座すと能勢先生は「彼は俺の二中時代の

江戸川を挟んで(2015)



鈴木尚賢氏(14期)撮影

教え子である」と紹介してくれる。暫くすると校長先生方は「次があります」と言って帰る。そうすると能勢先生は床の間から碁盤を持ち隣室へ行かれる。そこで対局が始まる。対局の途中に別の一団がやってくる。対局を中断して宴席へ移る。その一団が帰ると再び別室へ入り、つづきを打つ。午後三時を過ぎるともう誰れも来ない。能勢先生も私も囲碁に集中し無言で盤面を睨んでいる。

翌三日も前日と同様。その翌年も正月の二日三日と能勢先生と囲碁を打つ。その年の三月能勢先生は六十歳で定年退職された。その後は一度も対局をしていない。私は人生のひとつとき能勢先生と囲碁三昧で過ごせたことを幸運と思う。誠に感慨深いものがある。

秋のつきはし



原田健雄氏(13期)撮影



昭和30年5月15日発行 A5判20頁
編集責任者・故山本洋之氏(1期)



再発足後、復刊第1号の会報から
「題字」「総会報告タイトル」「編集後記」



市川駅に貼られた、右2次頁の「総会案内」
ポスターは、天野睦子氏(1期)制作による。

再発足初年度活動の仕として、会員相互の交流、情報交換の場として会報を企画し、皆様の協力でほぼ予定通りお届けできる事になりました。復刊第1号で、内容もやや堅苦しく、世代的偏りもあり、一人一人の息吹きをお伝え出来なかつたことを感じております。今後、会員それぞれ、特に若い方の積極的参加を期待しております。

ゼロからの出発で準備期間も短く、手作りを目指したため、お見苦しく行き届かない点もあろうかと思いますが、素人がパソコンを利用しての編集です。ご容赦下さい。

何れにしても、あまり気負わず継続する事を第一に、皆様の意見、ご批判を頂きながらより良く育ててまいりたいと考えております。

内盛(下村尚理事)にはパソコンの指導、印刷と大変お世話になり感謝しております。(山田 起)

広報委員 柿本正子 佐野純子
天野睦子 林 秀明 山田尚美
安谷澄子

● 編集後記



会報2号(1999)「初めての評議委員会」より

会報2号(1999)より

平成11年度
定期総会開催
緑陰の須和田が丘



市川駅のポスター
制作:天野理事(1期)

『市川二中五十年史』を手にして
鹿倉 操

『市川二中五十年史』は、多くの同窓生の人間関係の育成の輝きと、結実を内包した学校史である。

本文の行間からは、この一冊に懸けた執筆者の気迫の漲りが伝わってくる。各頁は、原資料を織り込み、手記や談話が挿入されて、その内容を十二分に裏打ちしている。又、写真等の割りつけも心にくい程だ。各章の初めの時代の「概説」と、出来ごとを要約した、8ポイントの頭註は、市川

二中の歩みと共に昭和・平成の歴史を重ね合わせることも出来た。もともと特筆すべきことは、この一冊に結集された百余名の編集・名簿整備委員会の溢れるようなエネルギーである。そして、そのチームワークへの熱い思いである。それはどこから湧き出てきたのであろうか。

同窓生が母校と呼ぶ学校は、小・中・高・大学とありながら、なぜ「市川二中」にこだわら、そこにど

んな魅力を見出し出しているであろう。今も関心事の高い課題として、私の胸中で暖めている。

編集後記の結びに「上梓に漕ぎつけ、当初の悩みは杞憂に終わり、今又望蜀の念に駆られている。」(傍点鹿倉)と述べている。山田氏のみならず、同窓生の皆さんの次なる取り組みを期待し、後輩への継承と精進を念願する一人である。(旧教員)

同窓会発足から今日に至る概略

(敬称略)

- 1951(26)年7月22日 同窓会結成準備委員会開催
- '51(26)年8月12日 第1回同窓会総会開催
- '52(S27)年5月18日 第2回総会開催(会長・桑村益夫 副会長・吉田和雄・陶山安三)
- '53(S28)年5月17日 第3回総会開催(会長・石塚信 副会長・田中芳雄・桑村益夫)
- '54(S29)年5月9日 第4回総会開催理事体制の確立(会長・田中芳雄 副会長・橋本佳代子・山本洋之)
- '55(S30)年1月4日 理事会において「会報発行の件につき協議」編集委員(桑村益夫・松本富美子・佐橋陽二・森川忠正・森薫・山本洋之)を決定
- '55(S30)年5月15日 『市川市立第二中学校同窓会会報』創刊号発行 編集後記は「この会報は未だ芽を出したばかりの幼い苗木である。しかしこれがやがて花を咲かせ、豊かに実るように育てて、やがてほしい」の言葉で結ばれている。
- 当時の記録によると、第4回総会より翌3月末までの入会金は25,400円、総支出は1,320円とある。
- (ここまでの歴史は同窓会創刊号より抜粋、この先の履歴については文書による記録はない。)
- '90(H2)年4月7日 『市川二中五十年史』制作に向けた取り組みを開始。以後、編集委員会(委員長・山田尚美)を結成、協力者を増やしつつ準備を続ける一方、「五十年史」の普及に向けて名簿委員会(委員長・桑村益夫)を立ち上げ、会員名簿の作成を進める。
- '97(H9)年11月1日 「臨時総会」開催再発足を決議し会則を決定、次回の総会日程・同窓会会報の発行・名簿整備と組織づくり・財政基盤の確立などを決定した。
- '97(H9)年11月15日 二中50周年記念式典開催
- 『市川二中五十年史』を刊行、賛助金は939名より4,877,000円が拠出された。
- '98(H10)年5月16日 同窓会定期総会を開催(会長・桑村益夫 副会長・山田尚美 内盛 渉 会計・井料京子・豊川章 松本伊佐夫 右記以外の理事14名を選出 会計監査・佐橋陽二 小出武志)
- この総会で「50年史編集委員会」より賛助金の残金と残部が移管された。移管された金額は456,534円で、



会報復刊1号(1998)
「創立50周年記念式典・祝賀会(1997年11月15日)」より

初恋の季節 —市川二中ブラバンの皆様へ—

2期 藤井 陽一

市川二中ブラバンの皆様、2期の藤井陽一です。先日の同窓会総会では、素晴らしいプラスの演奏を聴かせて頂き、とても感激しました。

私が、二中にいたころは、終戦の直後でしたから、今のような立派な校舎もなく、廊下は、ところどころに穴が明いた木造の校舎と、それから、昔の日本軍の兵舎を利用したので、廊下もない木造の校舎(現・養護学校のところにあった)でした。

で、今のような、立派な吹奏楽団なんて、まるで夢のようですね。第一、楽器、ホルン、チューバなんかが高くて、昔の二中ではとても買えなかったでしょうから。

でも、私たちは、音楽は好きで、音楽には初恋をしていましたよ。SPレコードを、誰かが借りて来て、レコードコンサートなんかをしていたりして。

そう、文学にも、初恋をしていました。昔の二中新聞に、こんな感じの不思議な文章を書いていて、みんなに怒られたり。そのころは、新聞部にいました。そして、文学部にもいました。その証写真も、昔の(今でも)可愛い女子中学生が持っていて、この前、デジタル化させて貰いました。

でも、そのころって、結局、新聞とか、文学とかはやらなかったみたい。ただ、初恋をしただけなんです。でも、恋って、時間を掛けて努力していけば、何時かは実るものなのですね。特に、文学なんて、人生そのものだから、長い間考え続けていけば、素晴らしい文学になるでしょう。

そういうわけで、どうか、皆さんも、恋をなさって下さい。音楽に対する恋もOK。文学だって、英語だって、科学だって、恋をして下さい。異性への初恋、これは勿論ですね。そして、どうか、素晴らしい初恋でありますように。

(元東大教授)



会報3号(2000)「総会報告」の頁より



会報4号(2001)
「恩師からのお便り」の頁より

右から、工藤・現校長、鈴木・元校長、元校長、鹿倉・小倉・鈴木・元校長、秋間・小倉・鈴木・元校長、高山・現教頭、他に賀賀沢先生も出席

会報4号(2001)より

深まりゆく秋の日の早朝、8時30分、市川市役所前集合。20期深川さんの手配下さったマイク・バスに乗り込み、桑村会長のお見送りで9時出発。桑村会長の「お見送り、予定のおりの方が多かったのでは、このツアーの参加者は8名(5期6名、7期1名、20期1名)とちよと少なかったのだが、山田さんと深川さんの用意して下さいました資料の説明もそこに、各自持参のお菓子や飲み物の分配が始まり、もう、すっかり中学生気分。分の往きのバスでした。

スマップ

SMAPと平次親分

◆さいたま新都心と小江戸川越めぐり◆
平成12年11月23日(木)
5期 市川遼子

都内の高速を走る頃には、秋晴れの澄んだ空気が高層ビルがキラキラと窓外に輝いていました。やがて紅葉始めた榎の並木の街、さいたま新都心に到着。辺りはまたまた低層住宅や畑で空がいつぱいに広がっており、突如現れた近代建造物群は、まるで映画の中の宇宙都市に降り立ったかのようにでした。幸か不幸か道路が空いていて、予定より大分早めに到着してしま

まっただけに、各施設はオープンしておらず入館することが出来なかったのですが、この不思議な空間に若者達が違和感もなく、何かに対照が印象的でした。彼らは宇宙人だったのでしょうか。表はその日の夜は、あのSMAPのコンサート初日だったようです。近頃しきりに言っていたスーパーアリーナと云う言葉が耳に入りました。

越の大火の後に耐火建造物として建てられる様になったこの事ですが、「時」を知らせる目的の「時の鐘」があたかも、火の見櫓のように見えました。

正午の「いしへの鐘」の音を聴いて安心しておそばを振り成田山別院 喜多院 川越本丸と歩いて博物館に戻り、記念写真を撮って、お土産のさつま芋のお菓子をしっかりと抱えて帰路に着きました。



※この項は32頁へ続く

その他に当年の新会員入金や賛助金などが追加され、再発足初年度の予算は843,534円。

開催案内の発送は約1,500人と記録されている(当時の卒業生総数はおよそ15,000人)。

総会では吹奏楽部の演奏があり、この伝統は今日まで引き継がれている。

講演Ⅱ柴山慶太(5期)「モンゴロイドの旅」

’98 H10年10月31日 『市川二中同窓会会報復刊第1号』を発行(以後第7号までは10月に発行)

’99 H11年6月6日 再発足第2回総会開催

(会長 桑村益夫 副会長 山田尚美・内盛 渉 会計 井料京子・篠崎實・加藤重夫 右記以外の理事14名を選出 会計監査 佐橋陽二・小出武夫 予算規模は150万円台に、年間執行額はおよそ100万円であるこの時より「抽選会」(現在は福引)が行われ、今日まで続いている。

講演Ⅱ池田真由美 部外講師 市川市立歴史博物館 学芸員 「六所神社を巡る須和田周辺の歴史」

2000(H12)年6月11日 再発足第3回総会開催

この時点での連絡の取れる会員は3千名で、賛助金への協力者は280名に上り、2か年でおよそ170万円と報告されている。予算規模は200万円台に、年間執行額は約100万円。

講演Ⅱ立原えりか(部外講師・童話作家)「私のタイタイ料理・いきタイ・食ベタイ・愛しタイ取材旅行での出来事」

’01 H13年6月3日 再発足第4回総会開催

この年より会則に基づき、役員任期は2年ごとの改選を確認した。

(会長 桑村益夫 副会長 山田尚美 会計 井料京子・篠崎實・加藤重夫 右記以外の理事15名を選出 会計監査 岸田弘 吉田和雄)

開催案内の発送は約4,000名と記され、返信が1,000名程度しかないことを重大視している。

(2016年の状況は、約1万名に発送して返信は600名弱である。)

講演Ⅱ藤井陽一(2期)「光通信の将来」



◆編集後記
 会報第5号をお届けします。
 猛暑の頃に編集開始。発行部
 数が増えて広報委員会での内部
 作成に限界も見え、今号は会報
 作成を一部外注しました。
 会報へのご意見ご感想をお聞
 かせください。
 広報委員 石原記



誌面を賑わせた、会報5号(2002)「同期会・クラス会だより」と「編集後記」より
 ※掲載された期は「2・3・5・8・14・16期」

母校の思い出

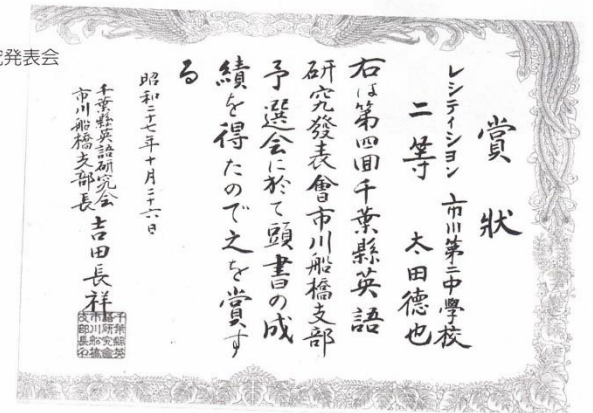
5期 中路 徐子

二〇〇〇年からドイツ・バイエルン州の首都ミュンヘンに住んでいる。ミュンヘンはドイツ人が住みたい都市のナンバーワンで、車で三十分も走ればドイツアルプスの山々が横並びに見える。天気の良い日は我が家からもくっきりと展望できる。とはいえ、故国が恋しいのは当たり前で、出来る限り一時帰国するようにしているが、近年は長時間のフライトがきつくて、段々帰るのが億劫になってきている。

数年前、暮れから正月にかけて一時帰国したことがあった。元日に散歩がてら母校迄足を延ばし坂を上ろうとして、ふと思いつき、今は養護ホームになっている建物(私が中学生の頃は確か「いわと別荘」という立派な家と素晴らしい庭園があった)の脇道を探した。もう無いかと思ったらまだ細い上り坂道が健在していた。この小道は私の隠れた近道の通学路だった。というのは、裏門への正式な通学路は大きな屋敷が並んでいる道を大回りしていかねばならなかったからである。

両脇に雑草と木々が茂る、人が一人通れるくらいの細道をゆつくり上がっていくと直ぐに校舎が見えてきて、道路の向こう側には校庭が広がっていた。快晴の冬空を見上げて懐かしさがいっぱい。この校庭で思い出したことがある。ちょうど時期も冬。当時は寒さが厳しくて、毎日のように校庭に霜柱が立った。そしてその霜柱が溶けると校庭も道もぐしゃぐしゃの泥道になる。とても普通の運動靴では歩けない。従って冬は毎日長靴を履いて登校した。歩きづらかったのは言うまでもない。

そしてもうひとつ冬で思い出す事。私が一年生の時は、右で



5期・太田徳也氏
 昭和27年千葉県英語研究発表会

書いた近道を登ったすぐ脇に戦争中の兵舎だけが残っていて、その建物を教室に使っていた。多分一年生がいつもそこで授業を受けていたように覚えている。なぜなら二年生からは校庭の向こう側にある本校舎に移ったから。要するに掘っ立て小屋みたいな教室で、床板の隙間から冬は冷たい風が上がってきた。授業中とても寒かった。教室の暖房はダルマストーブで、毎日掃除の時に当番が灰を掻き出していた。寒くてオーバークートはとても脱げなかった。

あれから約六十五年、東京で経験した戦災の記憶とともにとぎれとぎれながらいまだに残っている母校の思い出。

語り継ぐ母校の縦の木初御空



通称“へび道”を上ると、須和田口の坂を右手に小さな引き戸の門に辿り着く。



私が同窓会にかかわったのは平成十一年の第一回評議委員会からです。同窓会再発足の切っ掛けとなった『市川二中五十年史』刊行には直接携わっていませんでしたが、この『五十年史』が私が同窓会にかかわる切っ掛けを作ってくれました。『五十年史』刊行の中心人物であった同期の山田尚美さんに協力せねばと、同期の仲間の上野に集まってもらい『五十年史』購入の呼びかけをしたのが始まりでした。山田さんが同窓会のためにこんなに頑張っている、ほっとけない」という思いからでした。平成十三年に理事、平成十四年に副会長になり、平成二十七年に会長を退任するまで副会長七年、会長六年を務めました。夢中であれこれすることができ、思い出に残る十三年間となりました。振り返ってみると：

平成十七年に、中国江南地方へ同窓会初の海外旅行を企画しました。初代会長の桑村益夫さんが会長を退任し、江南地方の湖州にある日本企業で社長として勤務していました。慰労を兼ねて湖州に行こうということで、知り合いの中国人旅行ガイドに協力を依頼し、上海・湖州・杭州・蘇州をめぐるツアーを組みました。同窓生十九人が参加した思い出に残る楽しい旅となりました（詳しくは『会報八号』の六期生井上富美子さんの記事をご覧ください）。

親睦の輪を広げたいとの思いから、平成十七年にゴルフ愛好会を立ち上げました。第一回は多古CC、参加者は僅か八名でした。今は二十名前後が参加する愛好会に成長しました。経費節減は同窓会の永遠の課題ですが、平成十七年に会報発

心のふるさと

昭和二十六年に入学し昭和二十九年に卒業した三年間で思い出に残るものは、校舎、先生方と友達である。校舎は兵舎と木造平屋が混在していた。一年の時は木造兵舎、二年と三年の時は木造平屋の教室だった。三年間は兵舎を取り壊して木造平屋建ての工事が常に行われていた。校庭は赤土で冬場は霜柱が立ち、雨が降ればぬかるみ、履物は長靴か高下駄だった。都内からの電車通学だったので、帰りの駅では履物の泥をぬぐってから乗車していた。

一年は成毛昭先生、二年は中村樗先生、三年は江口利夫先生が学級担任だった。千葉（高木）先生は国語と文法、在原先生は理科と音楽、江口先生は数学と理科、中村先生は社会と日本史、寺島先生は英語、富樫先生は理科が担任で、今でも恩師の姿が目に浮かぶ。

部活は「気象部」で富樫先生が指導された。銚子測候所から区内測候所の一つに選ばれて百葉箱が校庭の一隅に設置され、観測器材も充実していた。台風シーズンには貴重な観測データを測候所に送るために、横なぐりの風雨の中で測定したことを懐かしく思い出す。三年の時には、繁田君、中川君と共同で、市川理科研究発表会で「夏の気象の研究」を発表して、成績優秀として表彰された。その表彰状は今も大切に保管している。当時塾などの受験勉強は必要なく、悪童仲間と遊びに夢中だった。校庭の西端には忠霊塔があり、雨の日はよく戦争ごっこなどして遊んだものである。まだ衣食住が満足でなかった時代だったが、この三年間は妙に明るく、楽しい思い出ばかりであ

行を秋から春に変更して、郵送料を大幅削減したのも思い出の一つです。秋に会報発送、春に総会案内を郵送していましたが、平成十七年に会報発行を秋から春に変更し、会報と総会案内の発送を同時に行うようにしました。

新しい概念が飛び込んできたのが個人情報保護法でした。五千人以上の個人情報を取り扱う団体・個人は個人情報の取り扱いについて規定しなければならぬということ、個人情報取扱細則を制定しました。平成十七年のことでした。平成二十四年十月一日にホームページを開設しました。会員がいつでも同窓会活動に触れられるようにしたい、また、市川二中同窓会の存在を世間に広めたい」という気持ちからでした。HTMLを一から勉強しなければと考えていましたが、第四代会長斎藤藤さんの紹介で山口信光さんに出会えたことでスムーズなスタートを切ることができました。とても有難かったですね。

思い出をいろいろ書きましたが、この間、市川二中の校長先生、教頭先生はじめ教職員の皆様には大変お世話になりました。母校のご理解とご協力があるから今の同窓会があるといえます。今後ともよろしくお願いいたします。



会報18号(2015)「ゴルフ愛好会・須和田会」より

卒業してからは友達と高校も違い、しばらく同窓会は開かれず機会がなかった。上級学校では理系コースを選び、昭和三十六年に関西へ移住して技術者になったのも、「部活」の体験からきていると信じている。

再び友達と会うようになったのは、昭和六十三年に東京へ転勤してからである。リタイアするまでの十年間余りは、同期会の幹事としてよく集まりよく飲み、同好の士でゴルフ（眞清水会の起源）をやり、恩師を招いて盛大に同期会も開催した。われわれ五期生は三年の時に同級だった三村君を中心としてよくまとまっていると自負している。

リタイア後は大阪府の北辺に帰巢して自然の中で悠々自適している。趣味の野鳥観察では、国内外の探鳥地で観察・撮影した野鳥を、市川二中同窓会HPの「会員登場―先輩後輩」の中で、「野鳥よもやま話」、「コストリカの旅」を紹介している。

最近では上京の機会が減ってきているが、年一回は三村君が中心になって有志が集まって懇談会を開いてくれる。仲の良かった友達が、年々鬼籍に入っていくのは悲しい出来事である。いずれは彼岸で会うことになる。喜寿となった今、故人となった友達の方まで元気に過ごそうと思うこの頃である。

わが市川二中は心のふるさととして、関西から「ふるさと」は遠きにありて思うもの。そして悲しくうたうもの」である。



『市川二中五十年史』より

私たち六期生は昭和二十七年四月に入学しました。長い間兵舎を教室にしていた先輩には申し訳ない、新校舎でのスタートでした。そこで胸弾ませて迎えた英語の授業でしたが、先生の病気で、間もなく休講となってしまいました。英語の時間はもっぱら、アルファベットを書いたり、いい加減に音読する日々でした。夏休明けに先生が戻られたら、一からやり直すからと言う、担任の地引先生の言葉に納得して自習をしていました。そんなある日、三年生の英語の高堀先生が私たちのクラスを覗いて下さり、授業をしてくださいました。一緒にいま練習していた課を音読した後で、後のほうの課のページを開かせて、読んで下さいました。そうして、「君たちも秋にはこの位スラスラと読めるようになるからね、心配しないで少しずつでも自分たちで勉強していなさい」と、力強く話して下さいました。これが私の記憶に強く残っている授業でした。

また、習字を教えて下さった大木先生からは、紛らわしい漢字の覚え方を教わりました。歌うように「巳は上に、己、己下に付き、巳、巳むのみ中ほどにつく」という具合に。

新美先生の実験的な理科の授業は、卒業後も実生活で沢山役に立ちました。ヒューズの交換もお陰で得意でした。

高橋先生から社会や歴史について習ったことが、後年市川と縁の深かった郭沫若氏について深い関心を持つ種をまいていただいたと、感謝しております。

雪の日の楽しかった雪合戦や、講堂がない私たちの外での卒業式も、今では楽しい思い出です。

暮れるまで裸足でドリブルしたっけね

— 女子籠球部の草分け時代 —

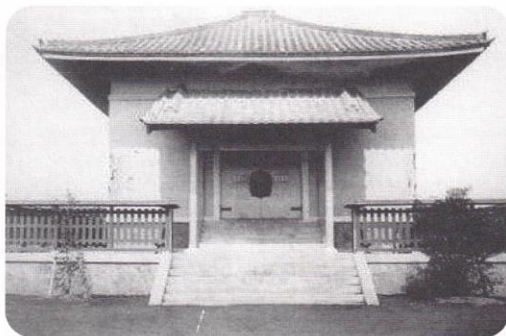
昭和二十八年(六十数年前です)の四月に二年生になってクラス替えがあり新しい級友が出来ました。その級友の一人から「今度籠球の女子部ができるんですって。一緒にやらない？」と声をかけられ、結局同じクラスの十名ほどがそろって入部、女子籠球部の誕生です。

男子の方は以前から活動しており、その顧問をしている高橋先生が女子部の指導も兼ねて下さることに。その頃はまだ体育館は無かったのでコートは屋外でした。現在の体育館の場所の、校庭の角地に向かい合わせに備え付けられたバスケット・ボードの間の土のコートの中で、時に土けむりと共にドリブル、そしてパス、シュートと放課後の練習に励みました。

県大会にも参加した記憶がありますが、どんな成績だったかわ覚えていないのは、きつとパツとしない結果だったからでしょう。覚えていいるのはユニホームを自分たちで作ったこと。当時市川で唯一の百貨店? だった「つるや」にみんな布地を選びに行き、顧問で女性の大木先生に助けて頂いて、裁縫室のミシンで一心不乱に縫い上げたのでした。

今考えると、終戦から十年にもならない時期であり、新制中学の「部活」は揺籃期だったのでしよう。すべて手探りの状況、それだけに自由な楽しい雰囲気だったなあと懐かしく思い出します。

忠霊塔(塚本写真館撮影)



同窓会ホームページより

郭沫若(文学者・歴史学者・政治家)1892年中国四川省楽山生まれ。1914年日本に留学の後、'28年夫人の郷里の日本に亡命し須和田に居を構えるが「盧溝橋事件」勃発により中国に帰国。'55年来日の際に須和田の旧宅を訪れ、長詩「別須和田」(須和田に別る)を詠む。'67年その詩碑が須和田公園内に建立された。'78年没。



須和田公園内





雪景色



まつり



七夕

原田健雄氏(13期)撮影

僕の二中

6期 高久 明利

私の人生は二中で作られたと言っても過言ではないと思います。とにかく学校に行くのが楽しくて楽しくてたまりませんでした。何故って、あんなに遊ぶ場所が沢山あった学校は他にありませんでした。山あり谷あり、ボロボロの旧兵舎、忠霊塔、そしてそばの洞穴探検、すべて楽しい思い出です。

途中で悪さをして市川警察にお世話になったこともありましたが、学校は休まず通い皆勤賞を頂きました。このことが警察官になった時に、随分役立ちました。

正確には三年と五日皆勤したことになります。それは平野先生が宿直の日に泊まりに行ったのが三回、雀のヒナを取りに学校の屋根に登ったのが二回で、いずれも夜に学校に行つたのです。先生のお話が面白く、歌も教えてもらいました。その時の歌が今も宴会の席などで大いに役立っています。

入学して間もなく、誰がつけたのか、眼鏡の「ドンチャン」というニックネームをもらい、クラスの人気者に。授業では在原先生の理科の時間が好きでした。試験の時オタマジジャクシの絵があり、私の「オタマ」という回答はバツでした。小学生の時から、「オタマ」といつていたのに先生は、「オタマ」は味噌汁をよそる道具です、と言われ抗議は却下されました。納得がいきませんでした。

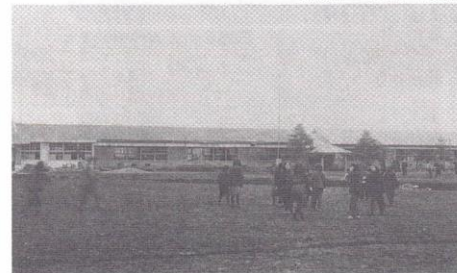
高堀先生の英語の評価はいつも2でした。英語の塾に通って頑張った結果、評価が4になり先生に褒められた時はうれしかったです。代々木警察署勤務になって、外国人に英語で道案内ができた時は、中学英語が役にたちました。

正面玄関(昭和27年3月竣工)



『市川二中五十年史』より

鈴木先生の国語の試験で達磨の絵を描いて、「手も足も出ません」と提出して酷く叱られたこともありましたが、市川市の募集した納税標語に私の「納税は毎日毎の心がけ」が入选して市長賞を貰うことになり、鈴木先生と市役所に行きました。その時の難しい顔が思い出されます。



昭和27年ころの校庭